

永青文庫蔵雑記類より（六）

秀吉の像の行方

西田耕三

垣塚尹長（?-1826）の随筆『東臯雑記』（現存、巻6、7、8、9の4巻4冊）巻8は、文化15年（1818）1月から書き始められた。内容は、明和（1764-1772）の初め、江戸で疫病が流行し、髪を抜けた人が僅かに残った髪で結った髪型が、不病者にもはやったこと、祇王が尼になる時、また北条氏康が小田原城で、義士松村喜兵衛が白銀台で切腹した時に詠んだ歌が道に叶ったものであること、備前池田侯が熊沢蕃山のことを、学問には委しいが武芸はだめであると評したこと等、雑多な事柄を記して、近世の随筆の特徴を十分に備えている。その中から、「太閤の像を泰勝寺にまつる件」という文章を紹介しておこう。長いので4つに分けて翻字する。

(1) 太閤秀吉没せられて後、秀頼天下に令して郡国に太閤の廟祠を建しめらる。其美麗壯観言計りなしと。是を号して豊国大明神と言。当御代に至りて、太閤之神社を廃して毀しめらる。其後、東照神君の廟を郡国に立しめ給う。肥後之先時代加藤清正は、就中太閤恩顧の人にて、熊城之里斗立田山と言所に豊国大明神の社有り。善尽し、美尽せり。今に龍田山の中腹に豊国大明神の廃跡有。土俗今に豊国跡と言。其美麗朝日に映じて、白川に魚住せずと言伝う。今の泰勝寺の並木道、豊国へ詣る道なり。

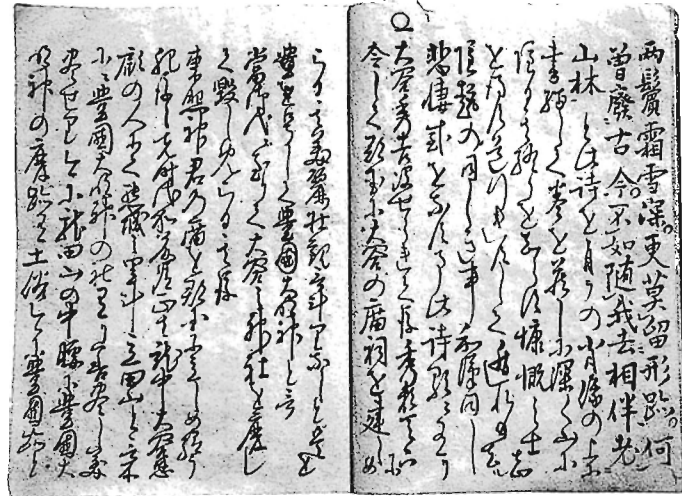
(2) 妙解公当国襲封より後、泰勝寺を小倉より此山に移し立玉う。太閤の肖像有しは百姓共呼り勿体なさに思ひ、百姓家に有しを泰勝寺に贈りしを、大淵和尚置所なく御仏殿之片端に置れけり。妙解公参拝之序に此像を見給ひて、如何成る像なるや、と尋玉ふに、和尚しか〜のよし語られき。其上にて和尚申されけるは、御像を御仏殿に長く扮置候もいかゞに候へば、境内に小き祠を取立、夫を安置して天神社なりとも唱置たし、と被申けるに、妙解公暫御思案有て御答へ被成候は、今日御即答に及ばず、得と思惟いたして御答可申、



『東臯雑記』巻8（1）

とのみ御答にて御帰遊ばし、翌日御書を被遣しに、得と御思案被遊候処、境内にほこらを取立候にも及申間敷、其像を本妙寺に遣し、清正之廟の上に指置候は、清正之靈も必ず大慶に被存べし、との仰により、大淵和尚、本妙寺の院主に談じて太閤の像を贈られしにより、清正の肖像を方丈の仏殿に移し、清正之廟の上に此像を納めらる。俗皆言、上の像は清正若き時の像、方丈に有るは老年の像なる由を申すは誤なり。

(3) 此物語、天明の初年、余が弟真鳥宇三右衛門と申者之養父真鳥一十郎秀長、余に語られき。此事は世の人しるべなければ書のこしぬ。一十郎は博覧強記の人なり。学問は水足半助の門人にて、博泉の朋友なり。天明二年十月二十六日没、年七十六歳、唐人町真光寺に葬る。墓銘、大城多十郎文卿先生に余頼て、余又書之。右之一事、余或時本妙寺の僧彼是に試み問しに、やはり土俗の説の



『東臯雜記』卷8 (2)

如し。此物語を断せば、寺僧都て疑ひて不信、愚なりと言べし。故に記し置ぬ。于時文化十五年戊寅二月晦日。

(4) 又案に、史記高祖記曰、高祖十二年崩群臣奏曰、高起<sub>レ</sub>微細<sub>レ</sub>揆<sub>レ</sub>乱<sub>レ</sub>世、反<sub>レ</sub>之正<sub>レ</sub>、平<sub>レ</sub>定天下<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>漢大祖<sub>レ</sub>、功最高、上<sub>レ</sub>尊号<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>高祖皇帝<sub>レ</sub>、令<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>郡国諸侯各立<sub>レ</sub>高祖廟<sub>レ</sub>、以歲時祠<sub>上</sub>云云。和漢趣を同じうす。

周知の通り、(1)の「豊国大明神の廢跡」は現存する。

(2)の初めの方は文意がとりにくいが、百姓家にあった太閤の肖像を泰勝寺に贈ったのは、百姓たちであったと解しておく。大淵和尚(1587-1652)は京都妙心寺の第139世。寛永19年(1642)に泰勝寺の開山となった。妙解公(細川忠利)は前年になくなっているから、妙解公と大淵和尚の問答は創作である。

(3)の真島秀長は「博覧強記」だけの人ではなく、着実な考証家でもあったことが、永青文庫に残る「<sup>せい</sup>成籍考」をみてもわかる。これは藩校時習館の書籍目録で、資料価値の高いものである。真島秀長の師水足半助は儒者水足屏山のこと。博泉はその子。博泉は神童の誉れ高く、長じて、荻生徂徠や伊藤長胤(仁斎の子)にも将来を囑望された人であったが、26歳で夭折した。水足父子に関

してはもう一つ名高い話がある。屏山の妻(博泉の実母ではない)が、熊本に流れて来ていた浪人と密通した。屏山は博泉を伴って妻敵討ちに出かけた。事前にそのことを知った浪人は、滞在中の家に仕掛けをして、屏山を返り討ちにし、博泉に傷を負わせて逃げた。近辺の武士が追いかけて浪人を討ち果たしたが、この事件で禄を断たれ、菊池に隠棲した博泉は半歳後に死んだ。水足父子のことは諸書に載るが、本書にも「水足博泉書院」という文章が収められている。大城文卿は壺梁と号した。時習館助教。文化8年没、71歳。垣塚尹長は書にもたくみであったから、「余又書之」となる。

(4)は、中国でも高祖廟を建てたことを記して「和漢趣を同じうす」と言う。和漢に同じ事柄があることに興味を示すのは近世に特徴的な発想で、和漢同想、和漢同情という言葉で随処にみられる。もちろん、『東臯雜記』の他の箇所にもみえる。

(にしだ こうぞう 文学部教授)